

研究紀要 第14号

Bulletin of Fukui Fine Arts Museum

vol. 14. 2023

目次

〈資料紹介〉

新出の富田溪仙書簡について

原田礼帆…………… 2

〈資料紹介〉新出の富田溪仙書簡について

(原田礼帆／学芸員)

はじめに

福井県立美術館では令和五年五月十二日～六月十一日にかけて「富田溪仙～越前の紙漉きを描く～」展を開催した。富田溪仙の代表作《紙漉き》(昭和三(一九二八)年、再興第十五回院展出品作、東京国立近代美術館蔵)の制作背景に迫った本展では、《紙漉き》に先立ち制作された《越前紙漉》(大正十五(一九二六)年頃、当館蔵)が、大正天皇・皇后陛下の大婚二十五年を奉祝して献上された現代絵巻のうち「越前の紙漉」の姉妹作であることに着目した。献上絵巻の制作に臨むにあたり、溪仙は実際に現地写生を行い、そして絵巻制作後も画題「紙漉き」を自身の中で醸成し、独自の芸術性を加えて展覧会出品作《紙漉き》を描いた。本展ではこの変遷を追い、溪仙の画題への取り組み方を考察した。

また、この現地写生が実現した背景には、大正中期から越前の紙漉き職人・岩野平三郎(一八七八～一九六〇)と溪仙との間に親密な交流があり、東西画壇を股にかけて活躍した溪仙が越前和紙の日本画壇への普及に一役買っていた状況が見えてきた。溪仙は後に現地写生で得た図様を基に紙漉き工程を画巻にした《越前紙漉之巻》(昭和三(一九二八)年頃、紙の博物館蔵)を岩野平三郎へ贈っており、生産地との交流の中でその地に生きる人々の営みも含め、つぶさに「紙漉き」を観察し、自身の制作に活かしていたと言える。

紙漉きには様々な手法があり、例えば紙料をすくう抄紙の際に、桁を手前から奥へ動かすか、奥から手前へ動かすかという技法には産地特有の差がある。越前では伝統的に奥から手前へすくう動きが主流であったが、岩

野平三郎が効率化の観点から手前から奥へと動かす技法を取り入れた。この違いは、溪仙の《越前紙漉》と《紙漉き》にも現れており、《越前紙漉》では奥から手前へすくっているのに対して、《紙漉き》では手前から奥へと桁を動かしている。この指摘は岩野平三郎製紙所の四代目代表取締役社長である岩野麻貴子氏をはじめとして越前和紙工業協同組合の皆様に本展を通してご教示いただいた。溪仙は献上絵巻制作のための現地取材にあたり岩野平三郎へ「可成的古式のさまが尤も希望致す次第」(富田溪仙書簡・岩野平三郎宛「紙漉見学につき県知事より紹介状のあったことを知らせる」大正十四(一九二五)年十月十二日)と述べており、献上絵巻と展覧会出品作に対する制作理念の違いが、改めて浮き彫りとなった。

更に本展開催にあたり、越前和紙の里にて紙の神様を祀る大瀧神社の県社昇格を記念して溪仙が奉献した《牡丹花に獅子図》のご出陳が叶うなど、越前和紙の里の皆様には多大なご協力をいただいた。

○新出の書簡

展覧会開催にあたり、地元に伝来した富田溪仙から岩野平三郎宛の書簡二件、横山大観から岩野平三郎宛の書簡一件が発見されたため、ここに紹介したい。

(一) 富田溪仙書簡

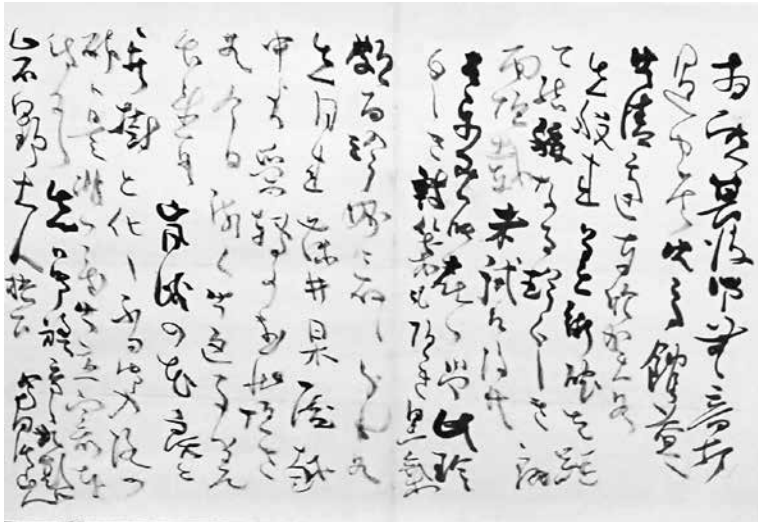
「扇面落掌、新葉の所感」

紙本墨書 掛幅一幅

制作年不詳 岩野平三郎宛

個人蔵

現在は軸装となっており、本紙のみ伝わり、封筒等は失われているため書かれた年代は不明である。新しい紙を試筆した所感として、墨気がすこぶる珍しいと記している。また、越中からの書状へ返信した旨が報告されており、岩野を介して北陸地方の人物が紹介された背景がうかがわれる。



拝啓其後御無音打

過申候御高館益々

御清適奉欣賀候

先般来美術院を経

て結構なる珍らしき扇

面頂戴未試候得共

御楽み此在候尚此珍

らしき新葉頂き墨気

頗る珍妙に存じられ候

先日來藤井某殿越

中より受託の書状頂き

候今日漸く御返事差

出置候嵐峽の花既に

新樹と化し不実御入洛の

砌は是非御来出立寄奉

給に候先日御礼方々如斯候

岩野大人梧右 富田溪山人

(二) 富田溪仙・横山大観

《岩野平三郎宛書簡貼交屏風》

紙本墨画 紙片貼交（二曲一隻）

富田溪仙書簡

昭和四（一九二九）年 七月三日 岩野平三郎宛

横山大観書簡

昭和十三（一九三八）年 十月二十六日 岩野平三郎宛

個人蔵

現在は二曲一隻屏風に横山大観書簡一通と富田溪仙書簡一通が貼り交ぜて表装されている。どちらも岩野平三郎宛であるが、関連性は無い。富田溪仙書簡は、紹介した知人の麻紙の注文状況を尋ねるもの。横山大観書簡は、鳥の子紙や大徳紙を求めるものである。

溪仙の岩野平三郎宛の書簡は、紙の質や使い勝手の意見よりも、越前和紙を他の画家や出版社へ紹介するものが多く残されている。これは紙質への注文が多い他の画家達の書簡とは異なる点であり、溪仙の人となりを示す貴重な資料と言える。

拝啓
 家信は拝見
 之節上候
 先般上京
 鳥の子紙之件候
 毎も御厄介のみ
 恐縮に存候へ
 託可求早之御
 調整被下度候
 大徳紙之好き
 風に裏紙と抱
 き合せ被下候
 猶更結構
 に存申候
 先は右御願
 置
 草々拝具
 十月二十六日
 横山大観

福井縣今立郡岡本村
 岩野平三郎様
 俊文
 東京下芝草子所
 横山大観
 十月廿六日

岩野平三郎様
 俊文

拝啓
 愈御清祥
 奉賀上候陳者
 先般御上京
 之節申上候生
 鳥の子紙之件候
 毎も御厄介のみ
 御願申上げ
 恐縮に存候へ
 託可求早之御
 調整被下度候
 大徳紙之好き
 風に裏紙と抱
 き合せ被下候ば
 猶更結構
 に存申候
 先は右御願
 置
 草々拝具
 十月二十六日
 横山大観
 岩野平三郎様
 貴下
 【消印】 ■ 13.10.26
 (昭和十三年十月二十六日)

展覧会開催及び本稿執筆にあたり、貴重なご所蔵品をご出陳いただきましてみなさまをはじめ、資料、情報のご提供など多くの方々にご格別のご協力を賜りました。謹んで深く感謝の意を表します。

